

規範意識の行動志向に関する一考察  
—ケアの倫理を中心として—

教職支援センター 檜垣公明

抄録

道徳性の発達については、J.ピアジェによる知的発達としての道徳性の発達理論があるが、その知的発達理論を発展させたのが L.コールバーグである。その弟子である C.ギリガンは、L.コールバーグの発達理論を男性中心の発達理論であると批判した。C.ギリガンが、女性特有の立場から道徳性の認知発達のプロセスとして人間関係（関係性）に着目したことは注目すべきことである。しかし、J.ピアジェも L.コールバーグも C.ギリガンも道徳性を知的発達の側面からのみアプローチしている。道徳性の発達を知的発達からのみ捉えていくことには限界があると考えている。道徳性の認知発達的基础になっている心の基盤形成「思いやり体験」に目を向ける必要があると考えている。C.ギリガンは男女の性差に着目して「ケアの倫理」を打ち出している。C.ギリガンは男女の規範意識の違いを性差による認知発達の違いとして、L.コールバーグによる男性優位の認知発達理論を人間関係を最優先する女性の立場から批判した。認知発達という知性の論理の過程で、人間関係（関係性）に着目したことには大きな意義がある。しかし、道徳性の発達を認知発達理論としての知的側面からのみアプローチしていくことには限界があると考えている。道徳性の発達に男女の性差の違いが在るのだろうか。人間を取り巻く環境や時代背景によって、男女の規範意識に違いが生まれることはあっても、本質的に大きな差はないと考えている。「ケアの倫理」における「人間関係の葛藤」の根底には、心の基盤形成における「思いやり体験」が大きく作用していると考えている。認知発達という知性の論理の前提となる、心の基盤形成における「思いやり体験」に焦点を当てることが重要である。心の基盤形成における「思いやり体験」の深さが規範意識の行動志向への「意欲」を生み出し、他者理解の基礎としての自己理解を深めていく。人間は規範意識形成において、他者とのかかわる体験の中で他者意識を優先させるのか、自己意識を優先させるのかという葛藤場面に直面する。その葛藤を乗り越え、人間関係（関係性）を構築していくのであるが、その根底には、心の基盤である「思いやり体験」があると考えている。

キーワード

道徳性の発達

「ケアの倫理」

人間関係（関係性）

心の基盤形成「思いやり体験」

意欲（主体性）

はじめに

平成 20 年中央教育審議会の答申によると、青少年における規範意識の希薄化が指摘されている(1)。今回の学習指導要領改訂において、規範意識の形成が大きな課題として挙げられている。

規範意識に関する道徳性発達の研究については、L.コールバーグの道徳性の発達に関する 3 水準 6 段階説(2)がある。その弟子である C.ギリガンは L.コールバーグの 3 水準 6 段階説の考えは、男性中心の発達段階説であり、女性特有の立場からその説に疑問を投げかけた(3)。

C.ギリガンは、L.コールバーグが 3 水準 6 段階の低位段階（段階 3）に位置付けた「人間関係を重視する段階」に関して、女性においては、この段階 3 こそが女性の人間形成に大きな比重を占めていると主張する(4)。この論文は今日において、人間関係（関係性）に着目する意味で、福祉ケア、医療ケアの分野で大きな波紋を投げかけている。

本論文は、規範意識の形成において、C.ギリガンによる「人間関係を重視する」ケアの倫理に焦点を当てながら、「ケアの倫理」の中心となっている「人間関係における葛藤」について、その根底にあるものは何かを問う形で展開している。ケアの倫理において、C.ギリガンが、道徳性の発達を認知発達の過程として「人間関係」に着目したことは注目すべきことである。しかし、その認知発達の基礎になっている心の基盤形成「思いやり体験」に目を向ける必要がある。L.コールバーグの理論もそれを批判した C.ギリガンの理論も、道徳性の発達を認知発達理論として知的側面からのみ展開している。両者の理論は、J.ピアジェによる知的発達としての道徳性の発達理論(5)の枠組みを発展させる形で展開されている。C.ギリガンは男女の性差に着目して「ケアの倫理」を打ち出しているが、道徳性の発達を認知発達理論としての知的側面からのみアプローチしていくことには限界があると考えている。道徳性の発達に男女の違いがあるのだろうか。人間を取り巻く環境や時代背景によって、男女の規範意識に違いが生まれることはあっても、本質的に大きな差はないと考えている。「ケアの倫理」における「人間関係の葛藤」の根底には、その前提となる心の基盤形成における「思いやり体験」が大きく作用していると考えている。ここで述べる「思いやり体験」とは、自分を大切に思ってくれている人の存在があることを実感することであり、身の回りの人々から支えられていることに対して感銘を受ける体験等を意味している。心の基盤形成における「思いやり体験」の深さが規範意識の行動志向への意欲（主体性）を生み出し、他者理解の基礎としての自己理解を深めていく。人間は規範意識形成において、他者とかかわる体験の中で他者意識を優先させるのか、自己意識を優先させるのかという葛藤場面に直面する。その葛藤を乗り越え、人間関係（関係性）を構築していくのであるが、その根底にあるものは、心の基盤である「思いやり体験」がベースにあると考えている。本論文では、規範意識の行動志向における主要な動機を要因 1・要因 2・要因 3 として設定している。それぞれの主要な動機の中に、「思いやり体験」にかかわる人の存在（関係性）があることを明らかにしようとしている。

本論文は、大学生アンケートによる、規範意識の行動志向における主要な動機の要因 1・要因 2・要因 3 を男女別に分析しながら、まずはじめに、C.ギリガンの「ケアの倫理」が女性特有のものなのか、男女に共通するものなのかを追求する。次に、規範意識形成における人間関係の構築過程で、規範意識の行動志向にはその前提となる心の基盤形成「思いやり体験」が大きく作用していることを明らかにしようとしている。

## 1 L.コールバーグと C.ギリガンにおける人間関係（関係性）の捉え方について

L.コールバーグの 3 水準 6 段階理論に対する C.ギリガンのケアの倫理における人間関係（関係性）の位置付け

L.コールバーグは、道徳性の発達段階をピアジェの認知発達の考えを踏まえながら、前慣習的水準、慣習的水準、後慣習的水準の 3 つの水準に分類した後、各水準ごとにそれぞれ 2 つの段階を設定している。

### L.コールバーグの道徳性の発達段階(6)

前慣習的水準 …段階 1 服従と罰への志向。段階 2 素朴な自己中心的志向。

慣習的水準 …段階 3 よい子志向（他者から是認されることや他者を喜ばせたり助けたりする人間関係重視の志向）。段階 4 権威と社会秩序の維持への志向。

後慣習的水準 …段階 5 契約的遵法的志向。段階 6 良心または原理への志向。

L.コールバーグの道徳性の発達段階に対して、C.ギリガンはこの発達段階の設定は、男性の被験者を基にして設定されたものであり、女性は物事を判断するときに人間関係を重視して判断していく傾向が強く、この発達段階を女性に当てはめると、女性は常に慣習的水準の段階 3 にとどまり、女性の道徳判断は男性よりも低位になってしまう。女性特有の立場から、道徳性の発達段階を再構築していく必要があると批判した。L.コールバーグが公正さに基準を置く正義の倫理に対して、C.ギリガンは人間関係の配慮に基準を置く「ケアの倫理」を打ち出した(7)。

### C.ギリガンの「ケアの倫理」の発達段階(8)

段階 1 自分の生存のために自分自身に配慮する。

段階 2 自己の欲求と他者への責任志向への葛藤を自己犠牲によって解決する。

段階 3 配慮と責任は自己と他者の両者に向けられ、傷つけないことが道徳的選択の基準となる。

C.ギリガンは、L.コールバーグによる道徳性の発達理論が、これまで男性の視点から、主に男性たちを被験者とした観察の結果から構成されたものであり、これを一般尺度としてしまうと、女性の道徳判断は男性よりも低くなってしまうことに疑念を抱いた。性差を踏まえた道徳

性の発達理論を構築しなければならないことを研究結果から打ち出している。C.ギリガンは、妊娠中絶決定を迫られている 29 名の女性の被験者（15 歳から 33 歳まで）を対象に面接調査を行った。その翌年の終わりに 23 名の女性を対象に追跡調査し、そのうち 21 名から参加の同意が得られた（21 名中、8 名の女性の人生が好転し、9 名が現状維持、4 名が悪化した）。追跡調査を基にして妊娠中絶決定における葛藤を、自己中心性から配慮と責任という人間関係の視点から分析しようとした。

C.ギリガンによる「ケアの倫理」は、妊娠中絶決定の葛藤過程を、段階 1 における「自己中心性」から段階 2 の「自己の欲求と他者への責任志向への葛藤」を越えて、段階 3 の「配慮と責任を人間関係の問題」として解決していこうとする過程として表している。この道筋は「自己中心性」を脱却し、「自己の欲求と他者への責任志向」の間で葛藤し、「配慮と責任」について、人間関係の中で自らどうすべきかを決定していく人間の生き方を示している。女性として避けることの出来ない危機的な葛藤場面に直面し、女性がどのように自らの生き方を見出していくかを追跡調査している。妊娠中絶決定の葛藤に際し、被験者の女性たちが選択したときの内容と本人の人生観や自画像、人間関係や仕事、生活感情に関する話を回想形式で面接している。ここでは、女性における道徳性の発達が認知発達の過程として述べられている。C.ギリガンによる「ケアの倫理」の構築は、面接に際し、カウンセラーの存在が大きい。カウンセラーのかかわり方が葛藤の解決に大きな影響を与えている。そのことを面接対象者の一人、サラを例に挙げる。C.ギリガンは次のように分析している。(9)

「生命を奪うという行為にたいして、責任がとれるものか？」と疑い、一方、「自分の罪深さを和らげようとして」子どもを、この世に送りだせるものか？とためらった後、最終的に選んだ道が中絶だったのです。現状では、いずれにせよ自己をも他者をも傷つけずにはすまされない、したがって、「正しい」道なんてありはしないのだと悟ったときが、サラの「転回点」でした。葛藤を残さない決断はあり得ないし、排除を含まない行動様式もないのだと悟ると、サラはジレンマに苦しみながらも、以前の考え方には限界のあることを知るのです。

中略

サラの生活も、自分にたいする見方も、道徳的判断が変わるにつれて変化していきました。サラの道徳的判断は、「だれが損をしなくてもすむか、だれがあまり傷つかずにすむかを問題にする」消極的な型から、より積極的な型、つまり、自他の要求を尊重し、その実現に心をくだく「思いやり」へと推移しています。

C.ギリガンは上記のようにサラの心の変化を分析しているが、サラの考えがこのように変化していく過程には、カウンセラーの存在が大きくかかわっていることを考えなければならない。

ここには、面接を通して葛藤を克服し、「ケアの倫理」における段階 3 へ成長していく女性の姿がある。L.コールバーグの道德性の発達理論に対して、C.ギリガンが女性の立場から人間関係に焦点を当てて批判したことは、大きな意味を投げかけている。しかし、道德性の発達について、認知発達の側面からのみアプローチしていくだけで十分なのだろうかという疑問が残る。この場合、サラにおける心の変容過程には、カウンセラーの存在が、サラにとっての心の基盤「思いやり体験」として機能している。認知発達の根底にある心の基盤形成「思いやり体験」に焦点を当てることによって、男性と女性という性差を越えた発達理論を構築していくことができるのではないかと考えている。

## 2 C.ギリガンにおける人間関係（関係性）の葛藤の克服から見えてくるもの

道德的葛藤に際して、社会秩序や社会的合意、普遍的原理という形式的、抽象的な解決ではなく、具体的状況に沿った形でかわりを持つ他者に責任を持つという観点から解決を求めるC.ギリガンの道德性の発達理論は大きな意味を持っている(10)。C.ギリガンは「ケアの倫理」において、段階1の自己へのケアという自己中心性から脱却するために、段階2では、他者へのケアを自己犠牲によって責任をとる形で解決しようとする。段階3では、段階2の自己の欲求と他者への責任志向への葛藤を自己犠牲によって解決することから解放され、責任は自己と他者の両者に向けられることを述べている。道德的葛藤を克服し、人間関係における判断へと高めている。C.ギリガンは、段階1・2・3の過程を被験者の認知発達の過程として捉えているが、被験者の判断力の変化には、C.ギリガン自身のカウンセラーとしてのかわりが大きく機能していることに目を向ける必要がある。道德性の発達に関して、この事例の場合は、C.ギリガンの被験者に向き合うカウンセラーとしての役割が、認知の基礎となる心の基盤「思いやり体験」として機能している。サラの場合はカウンセラーとの出会いであるが、C.ギリガンの『もうひとつの声』(11)の中にある、上記の妊娠中絶決定の葛藤に際した29名の被験者とは別の、女子大学生ケイトの例の中にそのことを見ていきたい。(12)

道德的問題は、「自分の選択によって、だれかが、なにかが、奉仕を受けられなくなる」という葛藤状況から生じるので、問題の解決は、「単純に、イエス・ノーを決めることではなく、もっと不都合なことになることもあるのです」。人間関係という細かな網目状にひろがる世界では、誰かが傷つくということは、そのまわりの人に累が及ぶことになります。決断を下そうとすればその道德性があげつらわれ、快刀乱麻を断つ類の解決の見込みをなくしてしまうのです。このように道德は、同意という理想に結びつけられたり、統合さに対置されるものではありません。むしろ「周囲の状況に含まれているたいせつなことを一つ一つ苦労しながら吟味した後、決定を下したり」、その選択に責任をもつことから生じてくる「統合といったもの」と並んでいるものです。つまるところ道德性とは、心くばりの問

題なのです。

C.ギリガンはケイトの道徳性について、人間関係という細かな網目状にひろがる世界の中で、周囲の状況に含まれている大切なことを一つ一つ苦勞しながら吟味した後、決定を下し、その選択に責任をもつ態度（行為）と捉えている。更に C.ギリガンは、ケイトがその選択に責任をもつということについて次のように述べている。(13)

責任とは、人を傷つけないというより、心くばりをする事であるとみて、ケイトはその限界を問題にします。「他人を助けるという点からみて、わたしたちは、おたがいにたいして責任を負うものです—これは、どこまでやればいいのか見当もつきませんが」。すべてを包みこむことは、道徳的意識の到達点であるにちがいありませんが、なにかを除外することも、人生に必要なことでしょう。ケイトは、「人生の個々の状況に、真にかかわって生きる人たち」をすばらしいと思っています。このような人びとは、超然とした無関心な態度からではなく、自他に深くかかわって生きるということ、人生の諸状況に身を埋めることにより、知恵を身につけているのです。

C.ギリガンはここで、段階3の「責任は自己と他者の両者に向けられ、その選択に責任をもつこと」について、ケイトが「人生の個々の状況に、真にかかわって生きる人たち」の存在に影響を受けていることに注目している。このような人びとは超然とした無関心な態度からではなく、自他に深くかかわって生きるということ、人生の諸状況に身を埋めることにより、知恵を身につけているのだと、ケイトが深く感銘していることを述べている。

「ケアの倫理」において、ケイトが深く感銘している箇所が心の基盤としての「思いやり体験」である。段階2における「自己の欲求と他者への責任志向への葛藤を自己犠牲として解決しようとする事」から解放され、段階3の「配慮と責任」を人間関係の問題として判断している。その判断の根底には、心の基盤形成にかかわる「思いやり体験」、人の心に深く感銘を与える体験を見てとることができる。自分自身の選択に責任をもつ判断に際し、その原動力となっているのは、心の基盤形成にかかわる「思いやり体験」である。ケイトにとって「人生の個々の状況に、真にかかわって生きる人たちの存在」が心の基盤「思いやり体験」になっている。ここには心の基盤形成に深い影響を与える人の存在がある。

### 3 規範意識の行動志向にかかわる人間関係（関係性）と心の基盤形成「思いやり体験」について

規範意識の行動志向にかかわって何が大きな動機要因になっているか、A 大学において、規範意識の行動志向にかかわる動機についてのアンケート調査を下記の内容で実施し、男女別に

分析した。

#### 規範意識の行動志向に関するアンケート調査（2012年1月実施）

##### アンケート内容

規範意識が行動化（態度化）される時、次の3つの要因のうち、どの事項が大きな動機となっていると考えるか、一つだけ選択して番号に○印を付け、下の欄にはその理由を記述しなさい。

- ① その行動がこれまで自分を支えてくれた人々（家族や信頼する教師、地域の人々等、身の回りの人々）の言動と深くかかわっていると感じたとき
- ② その行動に興味・関心（問題意識）を示し、葛藤しながら価値を見出そうとするとき
- ③ その行動が学校や社会のきまり（人間関係や秩序等の維持）であると判断するとき

#### A 大学学生アンケート総数 261 名（男性…174 名、女性…87 名）

##### 内訳

要因 1…122 名（男性…76 名、女性…46 名）

要因 2… 49 名（男性…36 名、女性…13 名）

要因 3… 90 名（男性…62 名、女性…28 名）

##### 男性総数（174 名）における要因比率

要因 1…76/174（44%）

要因 2…36/174（21%）

要因 3…62/174（35%）

##### 女性総数（87 名）における要因比率

要因 1…46/87（53%）

要因 2…13/87（15%）

要因 3…28/87（32%）

##### 分析結果

- 男性、女性ともに要因 1 が最も多く、次いで要因 3 になっている。
- 男性、女性ともに要因 2 の数が相対的に少ないことがわかる。
- 要因 1 については女性の方が男性より要因比率が少し多い。
- 要因 2 については男性の方が女性より要因比率が少し多い。
- 男性総数と女性総数に占める要因 1、要因 2、要因 3 の割合にあまり違いは無い。

## 要因 1 と回答した男性の主な理由

### 事例 1

規範意識が行動化（態度化）されるときは、その行動がこれまで自分を支えてくれた人々の言動と深くかかわっていると感じたときである。これは体験談であるが、私が中学生時代に社会のルールを守らず悪さをしていたときに、これではだめだと思わされたのは、両親からの言葉であった。どれだけ生徒指導の先生に注意されたり、社会のきまりだと考えたりするよりも、世界で一番大切に思っている人からの言葉はどんな言葉よりも重みがあり、迷惑はかけられないと思わせてくれた。もしかしたら、人によってはそれが両親ではなく、先生、祖父、祖母など、色々あると思うが、共通している部分は、みんな自分を大切に思っているところである。大切にされているからこそ、その人を大切にしたいと思う。これを感じたときに規範意識が行動化（態度化）されるときである。

### 事例 2

人間は一人では生きていけない。たとえ自我の強い子どもであっても、家族に養ってもらい、周囲の人にお世話になりながら生きているという意識は、少なからず持っているであろう。マナーやルールを守らない要因は多くあるが、当事者意識が無いのが原因であると考えます。人間は本来、法律や規則に従って行動しようとはしないものだ。身の回りの環境や人間関係によって行動しようとする。犯罪や非行をする子どもの数が減らないのは、法律や規則を強化しても規範意識は生まれてこないことを示している。しかし、日常から深くかかわり、感謝や信頼の心を抱いている人に対して裏切りの行為をすることは無い。規範意識が行動化（態度化）されることには、自分を支えてくれた人々の言動が深くかかわっている。

### 事例 3

私は高校生のとき、部活動で手の骨を折ったことがあり、調子を下げていた時期があった。しかし、監督は辛抱強く私を使い、「お前が出ているだけでチームが盛り上がる。」と言われたときに、このチームのために役に立っていると思え、チームに貢献しようという意識が生まれた。そこから私は、練習などに休まずに参加し、練習後の後片付けや掃除などにおいても率先して行うようになり、部員のお手本となるように心掛けた。このような経験から、規範意識は自分を支えてくれた人々の言動と深くかかわっていると感じたとき、行動化（態度化）されるのではないかと思う。

## 要因 1 と回答した女性の主な理由

### 事例 4



規範意識が行動化（態度化）される時、その人の心のどこかに、その行動がこれまで自分を支えてくれた人々の言動が浮かんでいると考える。私たちは毎日実感しているわけではないが、社会の中で支え合って暮らしている。そして少なからず、周囲の人をお手本として観察し、感銘を受けた場合には、「私もやってみよう。」という気持ちが生まれる。何事にも問題意識を持って取り組むことも大切だが、まず、自ら経験したことについて思い返ししながら、「なぜ、私はあのとき、こういった行動をとったのだろうか。」と振り返ることで、筋道を立てながら問題解決に取り組むことができるのではないかと考える。「無意識」という言葉の裏には「経験」があり、意識的に周囲の人々や自らの経験について思い出しているのではないかと考える。

#### 事例 5

私が要因 1 を選んだ理由は、これまで自分を支えてくれた人々に、今度は自分が返していきたいという気持ちが強くあって、その気持ちが行動化（態度化）させるのだと考えたからだ。3 月 11 日に起きた東日本大震災を例に挙げるとそれは多く見られる。震災復興に、阪神淡路大震災で被災された方が協力をするという報道を私はよく見た。あのとき助けてもらった、とても支えになったという神戸の人達はここで立ち上がろうとしたのである。あのときの恩返しをしたいという強い思いが行動化し、復興に協力するという実践につながったのだと思う。報道で伝えられたように、多くの人々が復興支援に立ち上がったそうだ。多くの支えられた経験（自己理解）が今度は自分が支える（他者理解）へと移行し、このように行動化していったのだと私は感じた。

#### 事例 6

私は最近、発展途上国を支援する NGO 団体に入って活動を始め出した。元々、青年海外協力隊などの活動に興味は持っていたのだが、なかなか動けなかった。そんなとき、つらい時期を支えてくれた大好きな先輩からその話を聞いた。興味を持っていたことに近かったし、その先輩の話なら信用できた。かつて両親から「大学は、経験の場や。」と言われたのを思い出した。それらがあって私は今、活動している。多分、その先輩や両親の言葉が無ければ、その団体の活動を知っていても動けなかったと思う。その人たちがいたからこそ動くことが出来たし、その行動に自信を持つことが出来た。このように、規範意識があっても、自分にかかわりのある人がいなければ行動することが出来ない。自分の行動を後押ししてくれるものは、自分が信頼、もしくは深く印象に残っている人の存在が大きいからであると思う。

要因 1 に対する見解に男女の差は見られない。共通しているのは、規範意識の行動志向には自分を大切に思ってくれる周りの人の存在、心の基盤形成としての「思いやり体験」が大きく影響している。

## 要因 2 と回答した男性の主な理由

### 事例 7

私はよりよい部活動に取り組む過程で規範意識が芽生えた。私に取り組んだことは誰よりも部活動に一生懸命打ち込むことだった。これはただ自分のためにしているように思われるが、自分のための行動が他人にも影響すると考えたからだ。高校の部活動で私が副主将をしているとき、部の顧問の先生から自主性の大切さを学んだ。私は言葉で指導するのではなく、私の行動により部員の意識を高めようと考えた。私は無遅刻、無欠席を目指し、誰よりも早く朝練を始めることを心がけた。元々、競争心の強い部だったこともあり、部員の雰囲気が変わっていた。自分の行動が他者に影響を与えることを実感した。

### 事例 8

生徒がやりたいことに対し意欲的に行動するようになれば、自ずと規範的な行動が出てくると思う。部活動においては、元々自然にルールが出来上がっており、生徒自身がやりたいことなので規範意識が行動化されやすい。授業における態度が悪い者でも部活動においては意欲的になれるのは、部活動内の役割があり、自分が必要とされていると実感しているからだ考える。

### 事例 9

私の実体験でいうなら、興味・関心があったから物事に対して自主的に行動することができたと思っている。誰しも自分の興味・関心があることに対しては熱心に行動するだろうし、その中で価値を見出そうとするときに行動するだろうと思っている。私自身、今の部活に入ってから大きく変わったと思っている。それまで内向的であったが、自己を見つめ、主体的に行動できるようになった。部活を通して自己存在感を獲得し、自己有用感を獲得したからであると考えている。人が物事に対して行動化（態度化）していく要因は興味・関心を持たせることである。教師は子どもに物事を教えるのではなく、考えさせることが必要であり、興味・関心が子どもを成長させると思う。

## 要因 2 と回答した女性の主な理由

### 事例 10

その行動に興味・関心（問題意識）を示し、葛藤しながら価値を見出そうとするときに規範意識が行動化されると考える。部活動で考えてみたい。部活動は自らやりたいと思って入っている。部活動の中で問題が起こったとき、その問題は部活動全体の問題でもあるが、自分自身もかかわってくる。そのときに葛藤しながら自分なりに「こういうことは必要なのだ。」と自然

に思うようになってくる。やらされているのではなく、自らやらなければならないと思うようになってくる。規範意識が行動化されるには、葛藤は絶対についてくるものだと思うし、逆に社会のきまりだからというだけでは規範意識もなくなってくると思うので、興味・関心を持つことは重要なことだと考える。

#### 事例 11

規範意識が自主的に実践されるとき、必要となるのは意欲だと考える。何もないところからやる気を出すことは困難だ。そのため、問題について興味・関心を持つことが肝要となってくる。しかし、それさえもなかなか難しいということがあるだろう。そのときは、その行動における良い点を見つめてみるとよい。心理的な思考になってはくるが、興味がわき、意欲を掻き立てることができる可能性が高まるからだ。その態度化によって得られる達成感を期待することによっても、やる気を出すことがより容易となるだろう。たとえもし行動するにあたり、はじめにやる気が出なくても、その行動の良い点を見つめて実践に移して行けば、その過程で達成感が得られる可能性は十分ある。大切なのは、行動の先に必ず得られるものはあるということを感じて態度化することだと考える。

#### 事例 12

私が中学 1 年生のとき、文化祭で 3 年生の先輩の素晴らしい演劇を観て、自分も 3 年生になったら、皆で力を合わせて後輩に感動されるような演劇がしたいと思った。でもいざ 3 年生になってみると、どの作品がやりたい、誰がどの役にするかでなかなか話が進まなかったり、受験勉強があるからといって準備を手伝わなかったりと、色々もめてしまった。私は裏方で活動していたのだが、舞台に出る人のために衣装を作ったり、備品を作ったりしていた。でもやる気のない人のせいでクラスの輪が乱れたり、舞台に出る人までやる気をなくしてしまったりしたときは、自分のしてきたことが無駄になってしまうと考えたら、自分までやる気をなくしてしまいそうになった。だがクラスの皆で話し合うことによって、それぞれがそれぞれの出来ることをし、お互いに尊重し合うことによって、自分のしてきたことに価値を見出し、文化祭を成功させることが出来た。意欲は行動を起こす大きな動機となると考える。

要因 2 に対する見解に男女の差は見られない。共通しているのは、規範意識の行動志向に関する「意欲」である。その行動に価値を見出した時、目の前の困難（葛藤）を乗り越えていこうとする意欲（主体性）が出てくる。

要因 3 と回答した男性の主な理由

#### 事例 13

人間一人一人の中にはそれぞれの価値観の差はあるものの、ルールや規律と呼ばれるものに対しての意識は少なからず持ち合わせていると思う。特にそれが仲間同士、学校、家庭内、地域などの小さなコミュニティの中のルールとなれば、余計にそれに対しての意識も強まると思える。それは国の法律などと違い、ルールを犯したときに、誰に迷惑がかかるか、自分へのマイナス部分がより想像しやすいからである。コミュニティの大小にかかわらず、ルールを犯すことに対してのリスクは想像できることが多く、最終的な判断をするときに、思いとどまることができる場合が多いと思われる。やはり、人にどう思われるかを気にする人が大半であり、人の目を気にするというのが大きな理由であると思う。そのような判断ができない者が、ルールを犯してしまうのであると考える。

#### 事例 14

人間であれば誰でも良心とそれに逆らう心を持っていると考えている。守るか守らないかは別として、学校や社会のきまりというものは、私たちが生きていく中で、必然的に理解されていくものである。規範意識を行動化できない者も、おそらく学校や社会のきまりについては知っている。ただ、行動しないのには、何か理由や考えがある。例えば、子どもであれば自分に注目してほしいとか、大人であれば社会に対するストレスを表す手段の一つであることが考えられる。しかし、きまりは守るべきものである。きまりの裏には自分以外の人への思いやりがあると考えているからだ。ただ単に、学校や社会のきまりを守るのが当たり前と考えるのではなく、それらの裏にある自分以外の人が見えたとき、規範意識が行動化されると考える。

#### 事例 15

前提として3つとも重要な要因と考える。その中でも自分自身が気付きを持つ瞬間こそが大切だと考える。初歩的な規範ではあるが、「廊下を走らない。」というルールを例に取り上げてみる。このルールを児童生徒が遵守するかと言えば、多くの者は守らない。教師が注意しても一時的である。では、子どもたちは、「なぜ廊下を走ってはいけないのか」ということについて、価値を見出そうとするのであろうか。子どもたちは、走ってはいけないのは危ないからだという理由を理解した上で走っていることが多い。子どもたち自身が実際に危ないと判断するときが行動化の要因となる。雨で濡れているときや、人が大勢いるとき、崩れそうな荷物を持っている人が傍を通るときなどに、「今、走ってはいけない。」という意識が芽生える瞬間が大切なのだ。相手や社会に対して、「迷惑をかけてしまう。」と感じたときにこそ、規範意識は態度化されると考える。

要因3と回答した女性の主な理由

#### 事例 16

私は要因3が大きな動機となっていると考える。きまりであると判断すれば、自分もしなければならぬと思うからである。授業中に私語をしないというのは、暗黙のルールであり、皆が認識している。そのため、授業を静かな環境で受けることができる。しかし、もし認識していなければ、静かに受けることはできない。授業をまじめに受けている側からすれば、その人は邪魔者であり、いやな人として認識され、良い人間関係は築けなくなる。人間関係を維持するためにも。その行動がきまりであるということを認識して行動する必要がある。自分だけでなく、周りの人への配慮も心がけなければならない。その行動がきまりであると判断すれば、自ずと周囲のことを考えた上で、行動しようとするのではないかと考える。

#### 事例 17

人が規範意識を行動化しようとするとき、周囲に対してその行動が社会的に必要であると判断したときであると思う。定められたルールやマナーを守るということは、自己が置かれている社会の秩序を守ることにつながる。つまり、自分だけの問題ではなく、そこには自ずと他人の存在を考慮しなくてはならない事情がでてくる。規範意識を行動化することで自分と他人の行いが相互に関連してくるということに気付くことができる。自分がルールを破ればどこかで他人にしわ寄せがきてしまうし、その逆もまた然りだ。自分で規範意識を行動化することは、自分が社会の構成員として責任を果たすことにつながる。行動化、態度化するという実践力の問題は、自分のみの問題ではなく、常に自分の行為が自分以外で連結しているのだと理解しなくてはならない。

#### 事例 18

人は誰でも対人関係のトラブルや集団でのめんどろなどは避けたいと考えるだろう。自分一人が学校や社会でのきまりを守らず、自分勝手な行動をしていると、その場の雰囲気だけでなく、その後の自身の居場所を失ってしまう可能性も出てくる。そういったことを考えると、自分の存在を示すために規範意識が行動化されるのではないかと考える。また、学校行事などで、なかなかクラスがまとまらないといったことがよくある。そのようなとき、クラスの友人たちに自分の力が必要とされていると感じた際など、人間関係を大切にしたいと考え、行動するのではないだろうか。教師からの注意だけでは、規範意識が行動化されるということはあまり無いだろう。教師も含めて周囲の人間の間でのきまりや関係を意識、理解することで、自分もその中で存在を示そうと行動するのではないかと考える。

要因3に対する見解に男女の差は見られない。共通しているのは、規範意識の行動志向にかかわる際の、周りの人、他者の存在意識である。他者との人間関係「関係性」、自分の周りの人に迷惑を掛けたくないという配慮の意識である。心の基盤としての「思いやり体験」にかかわ

る人の存在（関係性）が、規範意識の行動志向の場面で、第3者に対しても「配慮と責任」という行動（態度）として投影されている。

上記の事例は、規範意識の行動志向にかかわる動機要因1・2・3について、典型的な考えを挙げている。この事例からは男女の大きな差は見られない。どの事例にも共通しているのは、「関係性」としての人間の存在である。規範意識の行動志向にかかわる心の基盤「思いやり体験」にかかわる人間の存在、規範行動への意欲（主体性）にかかわる人間の存在、学校や社会のきまりという他者との「関係性」における人間への配慮である。

C.ギリガンの「ケアの倫理」の根底にあるのは、女性特有の論理ではなく、すべての人々が人間形成において共通に持っている心の基盤形成「思いやり体験」における人間関係（関係性）にあると考えている。規範意識の希薄化が起こるのは、心の基盤形成「思いやり体験」の弱体化にある。

大学生アンケートの事例1から18までに共通しているのは、規範意識の行動志向には人間の存在が大きくかかわっている。その人間とは様々であるが、自分を大切に思ってくれる人間の存在である。自分を大切に思ってくれる人間の行為や、自分に感動を与えてくれた人間の存在に感銘し、その行動に意欲（主体性）を示し、自分の周りにいる人間との「関係性」が、人間への配慮として現れる。心の基盤形成「思いやり体験」が意欲（主体性）を生み出し、それが自分の回りの人々との「関係性」につながっていく。

現代の子どもたちにおいて「意欲」の無さが指摘されている。『特別活動において社会性の獲得をどう進めるか』（日本特別活動学会研究開発委員会 2012年3月）における特別活動の実践課題等に関する調査アンケート(14)では、

8 自分から物事を進んで取り組もうとする。9 目標を立て達成に努力する行動力がみられる。

10 物事をやり遂げる行動力がみられる。11 創造的に考えたり実行したりする行為。12 いつも積極的に自分の意見をいう。16 自分から進んで勉強する。

8～12 と 16 の各項目でマイナス傾向が大きい結果となっている。いずれの項目も「意欲」に関するものである。「意欲」のマイナス傾向は、心の基盤形成「思いやり体験」の中ではぐくまれる人間関係（関係性）の弱体化に原因があると考えている。心の基盤「思いやり体験」の充実が意欲（主体性）につながっていく。

大学生アンケートの規範意識の行動志向の3つの要因に関する事例の中に、心の基盤「思いやり体験」に基づく「人間の存在」がある。心の基盤形成としての「人間の存在」は意欲（主体性）を生み出し、「自己理解」を深めていく。他者との「関係性」において葛藤が生まれ、葛藤を乗り越える中で傍観者意識ではなく、当事者意識としての「他者理解」が深まり、態度形成されていく。その過程を人間形成に関する循環サイクル図として表した。

人間形成に関する循環サイクル図における要因1・要因2・要因3の円内は、大学生アンケ

一の要因 1・要因 2・要因 3 と連動させて表現している。要因 1 の円内は、心の基盤形成「思いやり体験」を、要因 2 の円内は、自己理解形成を、要因 3 の円内は、他者理解形成を表現している。(15)。要因 1 の円と要因 2 の円の重なり合う部分は「意欲」を、要因 2 と要因 3 の重なり合う部分は「葛藤」を、要因 3 と要因 1 の重なり合う部分は「態度」を表現している。

C.ギリガンの「ケアの倫理」の発達段階との関係でいうと、段階 1（自己中心性）は自己理解としての要因 2 の円内に該当する。段階 2（自己の欲求と他者への責任志向への葛藤）は要因 2 と要因 3 の重なり合う部分の「葛藤」に該当し、段階 3（配慮と責任）は他者理解としての要因 3 の円内に該当すると想定して表現している。

要因 1 の円内が表している「心の基盤形成」については、J.ピアジェの知的操作の発達を中心とした認知発達論ではなく、H.ワロンの提起した人格全体として発達を追求していく、人間との「関係性」を重視していく考えに立脚している(16)。H.ワロンは子どもの精神発達の出発点において、J.ピアジェのいう物理的世界との関係から個人的存在が社会的存在になっていくのではなく、人間的環境との絆である情動を含めた混沌とした状態から個性を獲得していくと考えた。知的側面だけではなく、情動を含めた人間との関係性を通して個性を獲得しながら社会性を獲得していくと考えた。H.ワロンの主張するこの情動を含めた人間的環境こそが「心の基盤形成」にかかわる「思いやり体験」であると考えている。「心の基盤形成」については幼児期や児童期のみが関係するのではなく、思春期、青年期、成人期、老人期を含めて、人間が「思いやり体験」を深めていく過程で、何度でも循環していく機会や場でなければならない。家庭においては、両親を中心とした愛情のある温かい雰囲気が必要である。学校においては、学級を中心とした教師と子どもとの信頼関係、子ども同士の共通理解が必要不可欠であり、そこから何でも話し合える温かい学級風土が生まれる。誇りある学校風土が形成される。地域においては、祭り等を中心とした地域コミュニティの絆（社会的絆体験）が必要である。それらすべては快情動として、心の基盤としての「思いやり体験」となる。

心の基盤「思いやり体験」の機会や場は意欲（主体性）を生み出していく。意欲（主体性）が高まることによって、自己理解が深まっていく。自己理解が深まるからこそ、他者との関係の中で「葛藤」が生じる。現代の子どもたちの規範意識の希薄化には「葛藤」という経験の機会や場が少ないことが起因している。まず自分はどう考えるのか、他者はどう考えるのか、「葛藤」を通して自己理解が深まっていく。「葛藤」を克服していく原動力は意欲（主体性）である。

「葛藤」を乗り越え、C.ギリガンの「配慮と責任」（段階 3）を人間関係の問題として判断していく他者理解を深める原動力は、心の基盤「思いやり体験」からくる意欲（主体性）である。他者理解が深まる機会や場を通して集団としての「態度」が形成される。その「態度」が新たな場の雰囲気を創る。その機会や場はもはや当初と同じ機会や場ではない。心の基盤形成として、「思いやり体験」の質を高める機会や場となっていく。その循環を多様にしていくシステムづくりを学校だけではなく、学校を越えた地域に広げていくことが、今の子どもたちに求めら

れている。要因3と要因1の重なりとしての「態度」形成を生み出していく循環サイクルを創っていかなければならない。そのためには、地域コミュニティの対話を仕組んでいくことが重要である。規範意識の行動志向を高めていくためには、心の基盤形成「思いやり体験」の充実に目を向け、学校内の活動を見直し、学級を核としながら、教科、領域、とりわけ特別活動における学級活動（ホームルーム活動）・児童会活動・生徒会活動・クラブ活動（部活動）、学校行事等の有機的関連(17)を図る教育課程編成を工夫し、学校全体で取り組んでいかなければならない。その上で、地域コミュニティの活動とどのように連携、発展させていくか(18)を探っていく必要がある。

おわりに

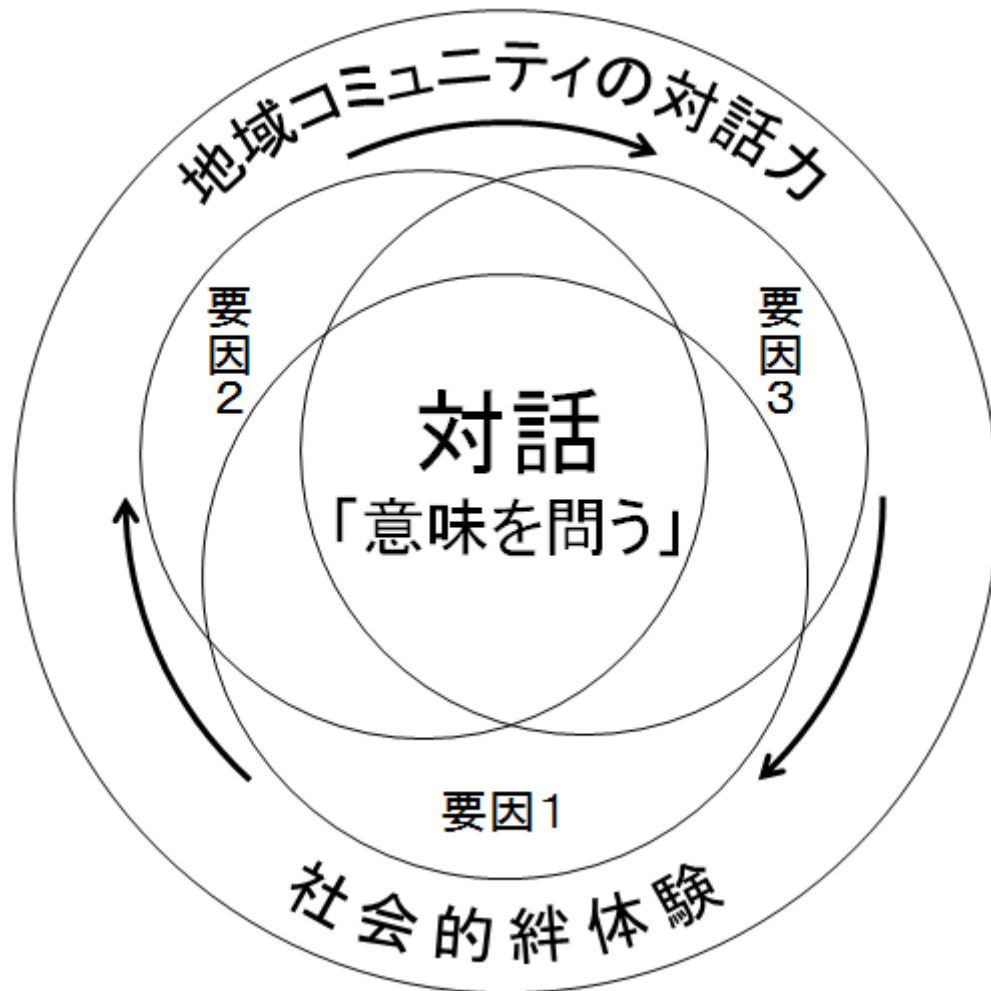
規範意識を形成していくためには、C.ギリガンの「ケアの倫理」が提起している人間関係論を中心としながら、その前提となる心の基盤形成「思いやり体験」の充実を図る必要がある。規範意識の行動志向の根底には、心の基盤形成「思いやり体験」が核になっている。C.ギリガンは、「ケアの倫理」として、「配慮と責任」（段階3）という主体的な態度への形成過程について述べている。道徳性の発達を女性の立場から認知発達の過程として捉えているが、知的発達を促す心の基盤「思いやり体験」に目を向ける必要がある。心の基盤としての「思いやり体験」にかかわる人の存在（関係性）が、意欲（主体性）を生み出し、「ケアの倫理」における「配慮と責任」という人間関係（関係性）として、規範意識の行動志向（態度形成）につながっていくと考えている。

学校教育における多様な機会や場で対話を重視しながら、地域コミュニティの対話を多様に構築していくことが規範意識形成につながっていく(19)。知的操作の発達に中心をおいた認知発達理論ではなく、人間との「関係性」を重視した人格の全体性を追求する発達理論を構築していかなければ、現代におけるいじめ問題、不登校、体罰問題等の教育課題は解決していくことは出来ないと考えている。



# 人間形成に関する循環サイクル図

— 自己実現への過程 —



要因1 ---思いやり（感性）、支えられる体験、身の周りの人々との対話（感化）、意欲、問題意識

要因2 ---自己との対話、価値観形成、葛藤、問題意識の違いの整理・分類

要因3 ---他者との対話、新しい価値観形成（問題解決方法の集団討論、支える体験）態度化、社会性・知性

「注記」

- (1)『平成 20 年版中央教育審議会答申全文と読み解き解説』明治図書、2008 年、pp.21-22。
- (2)L. コールバーグ「段階と秩序—認知発達の立場からみた社会化」『社会化の理論と研究に関するハンドブック』ディビッド A, ゴスリン編、第 6 章、1969 年、pp.376-377。  
CHAPTER 6, Stage And Sequence : The Cognitive –Developmental Approach To Socialization, Lawrence Kohlberg, Harvard University.  
David A, Goslin (Ed.), HANDBOOK OF SOCIALIZATION THEORY AND RESERCH. RAND MCNALLY AND COMPANY・CHICAGO , 1969, pp.347-480.  
L. コールバーグ『道徳性の形成 認知発達のアプローチ』永野重史監訳。新曜社、1987 年、pp.34-60。
- (3)Gilligan,C. In a different voice : Psychological theory and women’s development. Harvard University Press, Cambridge,1982.  
C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳、川島書店、1986 年。  
C.ギリガンの「ケアの倫理」は女性特有の論理として、L.コールバーグの道徳性の発達理論の中に取り込まれているが、道徳性の発達を人間関係論として提起している点は、医療ケアや福祉ケアを人間関係の視点で考えていく上で、多くの示唆を与えている。
- (4)同前 C.ギリガン『もうひとつの声』 pp.126-130。
- (5)J.ピアジェ『Le jugement moral chez l’enfant』,1932 年。  
『ジャン・ピアジェ・子どもの道徳観』霜田静志・竹田浩一郎共著、東宛書房、1936 年。  
原タイトル : Le jugement moral chez l’ enfant(抄訳)第四章道徳教育論 第三節結論、pp.697~709。  
『ピアジェ臨床児童心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達』大伴茂訳、第四章 児童の二種の道徳と社会的関係の類型(六) 結論、図書印刷株式会社、1957 年。pp.560~574。  
J.ピアジェの道徳性の発達を発展させた L.コールバーグについて  
J.ライマー、D.P.パオリット、R.H.ハーシュ『道徳性を発達させる授業のコツ—ピアジェとコールバーグの到達点』(Joseph Reimer , Diana Pritchard Paolitto and Richard H , Hersh , Promoting Moral Growth ; From Piaget to Kohlberg(1983),Second Edition,Waveland Press, 1990.) 荒木紀幸監訳、北大路書房、2004 年。
- (6)前掲 L.コールバーグ『道徳性の形成 認知発達のアプローチ』 p.44。
- (7)前掲 C.ギリガン『もうひとつの声』 pp. 126-130。
- (8)同前。
- (9)同前 C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳、川島書店、pp.207-218。

- (10)同前 C.ギリガン『もうひとつの声』pp. 159-168。
- (11)前掲 C.ギリガン『もうひとつの声』pp.257-262。
- (12)同前。
- (13)同前。
- (14)「特別活動において社会性の獲得をどう進めるか〜これからの特別活動の充実・発展をめざして〜」『日本特別活動学会研究開発委員会平成 23 年度報告書 第 20 回研究大会（宇都宮大学）課題別研究発表会報告』日本特別活動学会 研究開発委員会、2012 年、pp.26-28。
- (15)檜垣公明「人間関係形成能力過程における規範意識形成に関する一考察―地域コミュニティの対話を通して―」『教職支援センター紀要第 3 集』佛教大学 教職支援センター、2011 年、pp.1-13。
- (16)『ピアジェ・ワロン論争』加藤義信/日下正一/足立自朗/亀谷和史 編訳著、ミネルバ書房、1996 年、p.78

ピアジェ・ワロン論争の要約について『科学としての心理学』滝沢武久 訳、誠信書房、1960 年からの引用文「 」内

「ワロンは、ピアジェのこのような図式は全く現実と合致しないと考える。子どもの最初の状態が自閉的であるなどということはない。「子どもは生まれたときから社会的存在」というのは言い過ぎであるかもしれないが、子どもは生誕直後からもともと社会に向けて方向づけられた存在であって、子どもの人間的環境への依存というこの事実こそが、すべての出発点である。したがって、子どもの発達に最初に役立つ関係は、ピアジェがもっぱらその分析の対象としたような物理的世界との関係ではなくて、人間との関係である。子どもと環境（とりわけ人間的環境）との絆は、情動によって、溶け込み（participation）によって結ばれている。この情動によって、はじめは、子どもは「自分自身に属する以前に環境に属している」のである。次第に「個人」が現れるのは、あるいは「自我」が現れるのは、このような段階の後である。「自我は意識に最初から備わっているものでなく、一つの獲得、一つの征服である」。だから、ピアジェが考えるように、「子どもは、個人的存在から社会的存在へ移行する」のではなく、「反対に、はじめは自分とその周囲が混ざり合っている印象や反応から出発して、自らを個性化していかなければならない」のである。

以上の要約からわかる通り、ワロンの批判は、ピアジェの理論の根底に、子どもを他者に関わっていない、閉じた主体とみる個体主義的発想があると看取する点で、1928 年論争における共通している。しかし、その批判は、もはや知能の発達という土俵の上だけで展開されるのではなく、子どもの人格の発達全体を視野に入れてなされる。このようなワロンの側の批判の視点の拡大は、その後もピアジェによっては受け入れられるところとならず、「論争」としてはすれ違いの様相をますます深めていくことになるのである。」

H.ワロン『科学としての心理学』滝沢武久 訳、誠信書房、第二部 児童心理学の基本問

題 I 子どもの精神発達 P. 137、1960 年。

「情緒は、他人との伝達の手段である。それは他人と関係するもっとも粗野な手段であると同時に、もっとも強力な手段なのだ。よく知られているように、情緒はいわゆる原始文明の中では、儀式や儀礼のかたちで、その力がつかわれていたらしい。で、この儀式や儀礼が、集団的な情緒を発達させてきたのだった。

情緒は、本質的に、郡居した個人同士をむすびつける手段である。群集行動のための反省なき結合の手段である。とにかく、結合の手段という点に、情緒の本質をみとめることができるだろう。」

H.ワロン『科学としての心理学』第2部、I L'évolution psychique chez l'enfant (P'ediatric sociale.1952.p.799-812.)

(17)檜垣公明「特別活動における自主的、実践的な態度形成に関する一考察—問題解決能力形成過程(構造的分析図)における有機的関連性を通して—」『日本特別活動学会紀要第19号』2011年、pp.61-70。

(18)前掲 檜垣公明「人間関係形成能力過程における規範意識形成に関する一考察—地域コミュニティの対話を通して—」『教職支援センター紀要第3集』佛教大学 教職支援センター、pp.1-13。

(19)同前。

「参考文献」

- ・ H.ワロン『科学としての心理学』滝沢武久 訳、誠信書房、1960 年。
- ・ C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳、川島書店、1986 年。
- ・ J.ピアジェ『Le jugement moral chez l' enfant』,1932 年。  
『ジャン・ピアジェ・子どもの道徳観』霜田静志・竹田浩一郎共著、東宛書房、1936 年。  
原タイトル：Le jugement moral chez l' enfant(抄訳)。  
『ピアジェ臨床児童心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達』大伴茂訳、図書印刷株式会社、1957 年。
- ・ J.ライマー、D.P.パオリット、R.H.ハーシュ『道徳性を発達させる授業のコツ—ピアジェとコールバーグの到達点』(Joseph Reimer ,Diana Pritchard Paolitto and Richard H , Hersch , Promoting Moral Growth ; From Piaget to Kohlberg(1983),Second Edition,Waveland Press,1990.) 荒木紀幸監訳、北大路書房、2004 年。
- ・ 『日本特別活動学会研究開発委員会平成 23 年度報告書 第 20 回研究大会(宇都宮大学)課題別研究発表会報告』日本特別活動学会 研究開発委員会、2012 年。
- ・ 檜垣公明「特別活動における自主的、実践的な態度形成に関する一考察—問題解決能力形成

過程（構造的分析図）における有機的関連性を通して一」『日本特別活動学会紀要第 19 号』2011 年。

- ・ 檜垣公明「人間関係形成能力過程における規範意識形成に関する一考察—地域コミュニティの対話を通して—」『教職支援センター紀要第 3 集』佛教大学 教職支援センター、2011 年。
- ・『ピアジェ・ワロン論争』加藤義信/日下正一/足立自朗/亀谷和史 編訳著、ミネルバ書房、1996 年。
- ・『平成 20 年版中央教育審議会答申全文と読み解き解説』明治図書、2008 年。
- ・ L. コールバーグ「段階と秩序—認知発達の立場からみた社会化」『社会化の理論と研究に関するハンドブック』ディビッド A, ゴスリン編、第 6 章、1969 年。

CHAPTER 6, Stage And Sequence : The Cognitive –Developmental Approach To Socialization, Lawrence Kohlberg, Harvard University.

David A, Goslin (Ed.), HANDBOOK OF SOCIALIZATION THEORY AND RESERCH. RAND MCNALLY AND COMPANY・CHICAGO , 1969.

- ・ L. コールバーグ『道徳性の形成 認知発達のアプローチ』永野重史監訳。新曜社、1987 年。
- ・ Gilligan,C. In a different voice : Psychological theory and women's development. Harvard University Press, Cambridge,1982

「付記」

本論文は、2012 年 8 月 25・26 日に愛媛大学を会場として開催された、日本特別活動学会第 21 回大会 自由研究発表の原稿を加筆、修正したものである。